

提出日：令和 3 年 2 月 24 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 五十嵐 寛高 職位： 講師

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

学生が卒業して臨床獣医師として業務にあたる際、まず必要なのは専門的なスキルや知識ではなく、幅広い分野に関する知見である。特に、内科は数多ある専門診療科目の中で最も基本となる診療科であり、あらゆる疾患の発生や病態に関する知識を必要とする診療科である。私は小動物内科の教員として、際立った専門スキルを教えるのではなく（それは卒業教育で学ぶべきと考えている）、卒業後に現場で戦力となれるだけの幅広い知識および基礎的な診療スキルを伝えることが責務と考えている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
小動物獣医総合臨床	獣医学科	必	V5	約 150
臨床病理	獣医学科	必	V4	150
獣医内科学実習	獣医学科	必	V5	150
獣医放射線学実習	獣医学科	必	V5	152
総合獣医学	獣医学科	必	V6	143
小動物臨床実習	獣医学科	必	V5	152
小動物病院実習	獣医学科	選	V6	4

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

一般的な講義・実習の内容としては、基本的にモデル・コアカリキュラムに準拠した内容を過不足なく伝えるようにしている。特に、個人的な研究内容や過度に専門性の高いスキルについては、時間的余裕があれば一部の学生にはなお一層の興味を持たせられるのかもしれないが、実際にはモデル・コアカリキュラムの内容だけで講義時間が不足しがちのために控えている。参加型臨床実習においては、実際の症例の診断や治療が「教科書通りにはいかない」ことを学生が実感できるようにしている。特に、内科では複数の疾患を合併していたり、家庭の事情や金銭問題など獣医学以外の理由により教科書通りの対応ができなかったりするケースがほとんどである。これは卒業後にあらゆる獣医師が直面する問題でもある。そのため、参加型臨床実習中においては「見てるだけ」で終わることのないよう、「鑑別診断は何か」「必要な検査は何か」「なぜ〇〇の検査が必要か」など常に学生にクイズ形式で問いかけ、自分で考えながら診療に参加していけるよう努めている。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

内科系の教育は、基本的に数多ある疾患の病態や診断検査、治療などを覚えることが目標となる。これに対し、私は研究者としては消化器内科を専門としているが、専門外の疾患についても過不足なく伝える必要がある。そのため、日常的に学内または学外の教員や専門医と情報交換を行い、時には必要に応じて相談しながら講義・実習の資料の充実を図っている。

内科における講義科目では、語呂合わせのように〇〇疾患の診断は▲▲、治療は××といった1対1の丸暗記に進んでしまいがちである。これは、覚えるべき疾患の種類が膨大におよぶためでもあるが、教科書の文章だけでは疾患のイメージをつかみにくいことも影響していると考えている。そのため、実際の症例の画像や動画なども時間の許す限りスライド資料に組み込むことで、疾患や各種検査法・治療法のイメージが湧きやすい資料作成を心掛けている。また、参加型臨床実習では同資料を記録したタブレットを携帯し、実際の症例と講義スライドをリンクさせながら学生に説明し、講義内容の理解度上昇を目指している。

講義時間外にも自主学習できるようにするための教材作成が現状の課題である。前職の研究室では電子カルテシステムに応用可能なAIによる診断予測プログラムの研究が行われていたが、それを応用して仮想症例の診断や治療法を学生にクイズ形式で予測させるプログラムの作成を検討している。

アクティブラーニングについての取組

コアカリキュラムに基づいた講義内容で学習すべき内容が多いため、双方向性の講義は検討していない。講義で学習した知識を能動的に活用して施行するトレーニングは参加型臨床実習（小動物臨床実習・小動物病院実習）内で行うようにしている。今後は、上記したような学生自身で仮想症例の診断・治療を体験できるようなプログラムの開発を目指したいと考えている。

ICTの教育への活用

講義で用いたスライド資料や追加の動画教材などは学理内で公開している。ただ、実際の臨床症例を用いるため、個人情報保護のために学外者への閲覧は禁ずる旨を学生に周知している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

①教育（授業、実習）の創意工夫（A～C）

②学生の理解度の把握（A～C）

③学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

⑤双方向授業への工夫（A～C）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

① B 最新知見を反映するために毎年講義や実習資料は更新しているのだが、2020年度は

コロナ禍のために例年とはさらに異なる対応が必要であった。その中で、実習科目はどうしても実体験させることができない部分が多く、十分な教育効果が得られたとは言えないためにBとした（特に、内視鏡実習は実物に触れて操作感を認識させることが目的であるため、動画視聴させるだけでは講義とまるで変わらないと感じていた。また、前年度の学生は実技があったことを伝えると大変悔しがられてしまった）。

② A 授業評価アンケートにおける理解度に関するスコアはほぼ例年通りであったと考えられる。

③ C 講義や実習の教材の準備で手一杯であり、学生の自学自習については講義や実習でのレポート課題を課すことぐらいしか対応できなかった（これも不評であったが）。そのため、上記したようなアクティブラーニングの教材作りが当面の課題と考えられる。

④ A 学生からの質問メールに対しては、全て回答している。直接研究室に訪れた場合にもその場で答えるようにしているが、診療活動のため不在にしていることが多いため基本的にはメールでのやり取りで対応させて頂いている。

⑤ B コアカリキュラムに基づいた講義については、双方向性にした場合明らかに講義時間が不足するため実施していない（物理的に不可能と考えている）。一方、アドバンスな科目や実習科目については検討の余地があると考えている。現時点では、参加型臨床実習を対話型で進めることにより、一定の双方向性を担保していると考えている。

⑥国家試験対策としてどのような取組をしましたか。

V5までの講義資料をベースにしながらか、「国家試験だけで役に立つ」ような覚え方を指導している。ただし、卒業後の臨床現場では問題のある覚え方も含まれるため、その旨は学生に強く周知しながら行っている。

5.学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

② ①の結果はどうでしたか。

③ ②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

① 全て複数の教員で対応するオムニバス形式の講義・実習であるため、授業評価では自身以外への教員に対する結果・コメントがフィードバックされてくる。そのため、自身だけでなく他教員の教材やそれに対する学生のコメントを見ながら、自身の教材を修正するようにしている。

② 今年はコロナ禍のために例年とは異なる修正も多数含めたため、①の修正がどの程度反映されたか解釈に難しいと考えている。少なくとも、ネガティブな意見は頂いていない。

③ 次年度は対面&オンラインのハイブリッド形式となるため、それに対応できるような教材作成を心掛けたいと考えている。

6.学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

<p>② 教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価</p> <p>① 通常に対応ではあるが、講義資料や動画教材を学理で公開し続けることで復習しやすい環境を維持している。上記したようなアクティブラーニング教材が完成すれば、さらなる成績向上が望めるのではないかと期待している</p> <p>② 現時点において、特記すべき成果や評価は認められていない。</p>
<p>7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）</p> <p>FD 講習会については時間的に可能な範囲で出席し、出来なかったものについてはオンデマンド教材を視聴した（診療活動や育児の影響で、あまり出席できませんでした）。</p>
<p>8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）</p> <p>教育活動に関する今後の目標を記載してください。短期的な目標と長期的な目標を分けて記載してもかまいません。</p> <p>上記したような、学生自身が症例の診断・治療を仮想体験できるようなアクティブラーニング教材の開発が目標である。これは研修医などの卒後教育にも応用できるため、なるべく早期に実現させたいと考えている。また、研修医向けの教材としてセミナー動画などを Google ドライブに閲覧可能な状態で保管しているが、これも、アドバンスな教材として学生が自由に閲覧できるようにしたいと考えている。</p>
<p>9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ</p>